

二〇一三年五月二〇日 開催

「街角でふれるコトバと社会」シリーズ 第一回——ヨーロッパ言語グループ

コムーネからみるイタリア社会とことば

——ヴェネツィアを事例に

飯田巳貴

■講演者……飯田巳貴(専修大学准教授)

■司会……林 史樹(本学アジア言語学科教授)

イタリアという国とその社会を理解しようとする時、手がかりとなるキーワードのひとつは、コムーネ(commune)であろう。コムーネは、英語の“community”の語源となった言葉で、歴史的には中世に北・中部イタリアで誕生した自治都市を指す。また現在でもイタリア共和国における行政単位であり、州(regione、全二〇州)、県(provincia、全一一〇県)の下部に置かれるが、全土で八〇〇〇以上あるコムーネの規模は実に多様である。最小のものでは人口数十人の村から、最大では二五〇万以上の人口を持つ首都ローマの様な大都市まで、全てコムーネである。各コムーネは自立性が高く、その背景には各々の自然環境や社会システム、そして歴史が反

映されている。グローバリゼーションが声高に言われた時期、イタリアの都市や小さな町(コムーネ)の衣食住にわたる多様な魅力が、それに対抗するかのように語られることもあった。このようにイタリアの魅力は大小の都市に息づく個性的な芸術や生活文化にあり、それ故にイタリアは「都市の国」と呼ばれることもある。では都市の国イタリアの多様性は、どのようにして生まれたのだろうか？

本稿ではまず現代のイタリア社会におけるコムーネの位置づけと、その歴史的な形成過程を中世に遡って概略する。次に、筆者がかつて留学した経験を持ち、現在も研究の対象としているヴェネツィアのなりたちを紹介し、今も街中に残る歴史の足跡を紹介する。

イタリア半島では、五世紀後半にローマ帝国の西半分が消滅して以来、約一四〇〇年にわたって一つの国家に統一され



講演する飯田先生と、豊田先生

ることはなかった。現在のイタリア共和国は、明治維新と同時代の一八六一年に原型が成立し、約一五〇年の歴史しか持たない。古代末期から近代にいたるまで、半島内には常に大小様々な複数の国家が存在したのである。こうしたイタリア半島の歴史は現代においても、各コミュニェ社会の慣習、文化、言語など様々な形で見る事ができる。

イタリア人の帰属意識という点でこのコミュニェの持つ求心力は非常に大きく、「イタリア人」である前に、「ヴェネツィア人」、「ミラノ人」、「ローマ人」といった

意識が非常に強い。コミュニェの中心には広場に面した教会があり、その鐘楼（カンパニレ）が見える、鐘が聞こえる範囲にアイデンティティを持つ、カンパリニズモと呼ばれる狭隘な郷土愛もイタリア社会の特徴として挙げられよう。

イタリアの知人か

ら、「我々がイタリア人という自意識を持つのは、ワールドカップサッカーでイタリア代表を応援する時だけ」と、本気と冗談が半々のセリフを聞いたことがある。イタリアといえばサッカーでも有名だが、地元チームに対する熱愛ぶりは強烈である。試合時間、どの家の窓からも試合の中継音声と歓声（あるいは悲鳴）が聞こえ、街角のバルでは街頭テレビの前に常連が陣取る。町の中央広場にはパブリックビューイングが設けられ、試合が勝利に終わると、街に繰り出して大騒ぎである（もちろん、そうした騒ぎには一切無関心な住民もいる）。

さてイタリアのほとんどの都市は、一時中断などがあっても古代に起源を持つが、後述するヴェネツィアなど、中世期に新たに建設された都市も存在する。イタリア半島の北・中部で、十一世紀頃から都市を中心に住民の自治による共同体、つまりコミュニェが誕生した。その中でも有力なコミュニェが次第に周辺の小都市や農村地域（コンタード）を併合していわゆる都市国家を形成し、主に太商人層が支配する市民共同体（都市コミュニェ）となった。さらに中世後期には、広い領域を持つ領域国家にまで発展する場合もあった。十五世紀の北イタリアには、大小様々な国家が存在していた。各国家の政体（独裁政、寡頭政、共和政）や発展の経緯は様々であり、またそれぞれの国内では、もつと規模の小さいコミュニェが自立性の

高い社会を形成していたのである。

十六世紀に入ると、スペインとフランスの間でイタリア半島をめぐる「イタリア戦争」が勃発し、ナポリやミラノはスペインの支配下に入った。その後十八世紀末までイタリア半島の政治的枠組みに大きな変化はない。十九世紀前半のフランスやオーストリアの支配を経て、世紀半ば以降独立運動が高まり、世紀後半に徐々にイタリア王国への統一が進んだ。しかし統一国家になった現在でも、各コムーネの自立性は高い。

コムーネの独自性は、言語にも及ぶ。現代の標準イタリア語は、中世中期後記にフィレンツェなどを中心とするトスカーナ地方で使用された「俗語」が基になっているが、イタリア半島では方言が現代まで色濃く継承され、方言(地方語)辞書の出版も盛んである。筆者は、中世後期から近世にかけてヴェネツィア商人が作成した商業関係の史料を読む機会が多いが、こうした私文書は、いわゆる標準イタリア語の知識だけでは到底解読できないものが多い。

さて、アドリア海の深部、陸から数キロ離れたラグーナ(潟)に浮かぶ都市ヴェネツィアは、イタリアの大都市としては例外的に、古代ローマ期には存在しなかった都市である。この地域は多くの川が流れ込むため、潮の干満によって土地が出現するような水深の浅い潟が広がり、比較的固く高い土

地には別荘や小屋が建てられていた。四〇五世紀頃から、北方よりゲルマン系を中心とした人々がアドリア海深部の沿岸地帯にも姿を見せるようになり、近隣の住民は、これを恐れてラグーナに一時的な避難を繰り返した。

ラグーナは天然の要塞であった。全体的に水深が浅く、船が航行できる水路は限られる。

水路を示すためにプリコラと呼ばれる標識が立てられているが、敵が襲ってきた場合、これを抜いてしまえば、敵は座礁してしまう。さらに陸に上がると、ぬかるみに足を取られて先に進むことはできない。ヴェネツィアはこの方法で、戦わずして何度も敵を撃退し、一七九七年まで、約一〇〇〇年にわたる独立を維持したのである。

ラグーナに避難した人びとは、やがて自然の水路を生かし、比較的固くて高い土地に小島を埋立てて建設し、定住を開始した。埋め立ては海水下の固い粘土層の地層に一〇メートル以上の松材を隙間なく打ち込み、その上に土台石を置いて煉瓦を主体とする軽量の建物を建築した。小島の中心には小広場(campo)がひらけ、その周辺に教会や有力者の家が並ぶ。広場から伸びて海端に至る細い路地の両側には住宅がひしめいていた。

その後一〇〇以上の小島が四〇〇以上の橋でつながれ、水路は「運河」と呼ばれるようになった。現在のヴェネツィア

は魚の形をした大きな(といっても二キロ×四キロ程度)島を形成している。橋は小島同士をつなぐために後から無理にかけたので、斜めにねじれた形になっているものもあり、下の運河を船が航行できるように全て太鼓橋になっている。

ヴェネツィアでは面積に比較して教会が多い。これは、かつて各小島が独立した共同体で、各島々に教会があった名残りである。また他のイタリア都市と比較すると、社会階層の差による土地の住み分けが比較的小さいことも、小島の集合体だったことの名残りであろう。

ヴェネツィアに多い小広場は、他都市と違い、ピアッツァ(piazza)ではなくカンポ(campo)と呼ばれている。ヴェネツィアでは、ピアッツァは、都市の中心であるサン・マルコ広場(Piazza San Marco)のみに用いる。標準イタリア語では、カンポは一般に「畑」を意味するが、ヴェネツィアでは、都市の創成期に埋立て建設された各々の小島の中心にあった広場(空き地)をカンポと呼んでいた。小島が橋によって結ばれて現在の様な都市が形成された後も、地域の精神的中心としてカンポの場所と名称が残された。

ヴェネツィアは埋立地で農業がほぼ不可能であったため、都市の建設当初から、住民は生きるために食料調達を目的とした商業を展開した。周辺の魚や近郊の沿岸地帯に設けた塩田で採れる塩と内陸の穀物等を交換する河川交易から、海上

へ交易の場を拡大していった。イタリア半島の東岸は地形の影響で良港が少ないことから、入り江や島が点在する対岸のダルマティア沿岸を征服しながらアドリア海を南下し、地中海へ進出した。地中海では、当時の先進地域である東地中海域(東ローマ帝国やイスラーム世界)と、後進地域のアルプス以北(ヨーロッパ)を結ぶ中継交易を展開し、十六世紀に至るまでヨーロッパ商業の覇権を維持したのである。

十九世紀にイタリア本土と長い鉄橋(リベルタ橋)で結ばれるまで、「水上都市」ヴェネツィアへのアクセスは船に限られ、都市の正面玄関はサン・マルコの船着き場であった。大通りに該当するのは、大運河(Canal Grande)である。かつて移動は主に水路が用いられたが、今では多くの運河が埋め立てられて街路となっている。それでも、水路は今でも自動車が入れないヴェネツィアでは最も効率の良い移動と輸送の手段である。大量の荷物を運ぶには水路が最も効率が良いことには変わりない。早朝には、各種の運搬船やゴミ収集船、郵便船、建材を乗せたごつい船、昼間は観光客を満載した水上バス、水上タクシー、観光ゴンドラが盛んに行き来する光景を目にすることができる。

ヴェネツィアの街路は概して狭く、地盤沈下によって建物の壁が街路に向かって傾いている場合もあるが、面白いのは、同じ街路でも様々な名称がついていることである。イタリア



ヴェネツィア、効率的な移動・輸送手段の水路

の都市では、一般に街路は *Via* を用いるが (*Via Nazionale* など)、一方で地方色豊かな名称も多く存在する。ヴェネツィアでは、水路に関しては、主要な運河は *Canale*、小運河は *rio* と呼ばれる。一方、街路は *calle* (小路)、*riva* (河岸)、*salizada* (石畳で舗装された道)、主要街路は *rio terra* (小運河沿いの道)、*fondamenta* (比較的新しい運河に沿った道)、*ruga* (路地を意味する古語)、*sottoportego* (くぐり道) など、

実に様々な名称がある。くぐり道とは、路地の入口にかけられたトンネル状の通路であり、敷地の狭いヴェネツィアで、路地の左右の住宅が二階以上を増築した結果このような形状になっている。一見してわかるように街路の名称は水路に係するものが多く、やはりヴェネツィアでは水路が交通の基本であったことが理解できる。

また街路には、往時のヴェネツィア商業の広がり象徴するような名称が多い。たとえばリアルト地区にある「カッレ・トスカーナ」は、トスカーナ地方のルッカから移住した絹織物職人や商人が多く住んだ場所である。リアルト橋から市場に向かうアーケードの一本裏手には、毛織物や絹織物の展示販売を行っていた「パラングン(ヴェネツィア方言で「比較する」という意味)通り (*Calle del parangon*)」がある。リアルトからサン・マルコ広場へ至る道は、「メルチェリア (*Merceria* 小間物通り)」と呼ばれている。また、マルヴァシア通り (*Calle Malvasia*、マルヴァシアとは、クレタで生産される甘くアルコール度数の高いブドウ酒)、ムーア人広場 (*Campo dei mont*) など、東地中海地域との商業に関わる地名も残されている。

ヴェネツィアは、都市の成立当時から生きるために交易を生業とし、異国での取引を活発に行う一方で、自らも異教徒や外国人を寛容に受け入れた。例えばヴェネツィアを訪れる

外国人は、主に出身地ごとに宿泊施設を提供され、そこに滞在して商取引を行った。こうした施設はヴェネツィアではフォンダコ (fondaco) と呼ばれ、ヴェネツィア経済の中心地であったリアルト橋のもとに位置するドイツ人商館 (Fondaco dei Tedeschi)、現中央郵便局) や、オスマン帝国から訪れるムスリム商人が滞在したトルコ人商館 (Fondaco dei Turchi、現自然史博物館) が有名である。実はこのフォンダコという名称は、「隊商宿」を表すアラビア語フンドウクに由来し、建物の内部構造もイスラーム世界の隊商宿によく似ている。イスラーム世界を訪れたヴェネツィア商人は、現地でこのフンドウクに滞在して取引をおこない、その名称と優れた機能を自身の故郷に持ち帰って活用したのである。

また大運河(あるいは中小の水路)に面して立ち並ぶ貴族の館は、家 (casa) が訛って ca' と呼ばれている (ca' Barbarigo Ⅱバルバリゴ館など)。これらは商取引と社交および家庭生活が一体となった機能を持つ商館であり、その内部構造もまた、おそらくイスラーム地域の商業施設の影響を受けている。水に面した一階部分は、通常船が着く出入り口および荷物の倉庫となっており、二階部分に商取引および社交の場となる大広間があり、同時に二階・三階は家庭生活が営まれる場でもあった。

商館では、オープンエアの中庭に内階段がつけられている

ことも多いが、これもイスラーム世界の隊商宿ないしは商業施設に倣ったものである。前述のドイツ人商館やサン・マルコ広場近くのスキアヴェオーニ河岸に建つ最高級ホテル・ダニエリ(かつてダンドロ館とよばれた十四世紀建設の商館)、現在フランケッティ美術館となっている、リアルト橋近くのカ・ドーロ(黄金の館)などで見ることができ。街路からのアクセスは、大抵薄暗くて狭い(そして猫や犬の落し物が多い)路地を通ることになるが、かつてこうした路地は基本的に裏道であり、商館へのアクセスは水路が基本であったことを思い出せばよい。ヴェネツィアでは、歩くだけではなく、是非手軽な水上バスでの移動も体験してほしい。かつてヨーロッパとイスラーム世界を結んだ、水上都市ヴェネツィアの本来の姿に出会うことができるだろう。

参考文献

齊藤寛海・山辺規子・藤内哲也編『イタリア都市社会史入門』昭和堂

亀長洋子『イタリアの中世都市』(世界史リブレット106)

山川出版社

齊藤寛海『中世後期イタリアの商業と都市』知泉書館

ルカ・コルフェライ(中山悦子訳)『図説ヴェネツィア

- 「水の都」歴史散歩』河出書房新社
- 陣内秀信『ヴェネツィア 水上の迷宮都市』講談社現代新書
- 陣内秀信『イタリア海洋都市の精神』（興亡の世界史8）講談社
- 陣内秀信『イタリア小さなまちの底力』講談社＋アルファ文庫
- 『週刊ユネスコ世界遺産 No.22 ヴェネツィアとその潟』講談社
- マクニール（清水廣一郎訳）『ヴェネツィア 東西ヨーロッパのかなめ』講談社学術文庫
- アルヴィーゼ・ゾルジ（金原、松下、米倉訳）『ヴェネツィア歴史図鑑』東洋書林
- 馬場康雄、奥島孝康編『イタリアの社会…遅れて来た「豊かな社会」の実像』早稲田大学出版部
- 北村・伊藤編著『近代イタリアの歴史』ミネルヴァ書房
- 北原敦編『イタリア史』（新版世界各国史15）山川出版社
- 島村奈津『スローシティ…世界の均質化と闘うイタリアの小さな町』光文社新書
- 井上ひさし『ボローニャ紀行』文春文庫